

この世に存在する作品はそれぞれに価値があり、唯一無二。人間の命のそれと同じ。テーブルの上に作品を並べる。じっと見る。一つ一つが、どれともぶつからず、睨み合わず、喰い合わず、スックと凛々しく美しく立っている。思わず、「どうしても選ばなあかんなあ……」と、こぼす。今年はそんな年だった。それぞれの作品が輝きを放つけれど、その輝きが他の作品の輝きを飲み込んだりしない。美しく共存しているとも言えるし、互いに攻撃し合わないとも言える。これが果たしてBADかGOODかはわからないけれど、演劇はいつだって社会の鏡なのだろう。

久野那美さんの『それは、満月の夜のことでした』は、ゴロリと転がる丸い月がとても美しい。その月は、軌道のとおり転がる。パン工場の門をくぐり、やがて空に昇る。ラスト前の長いト書きは、物語の中にある満月が創造物から、本当の自然物へと変化していくト書きなのだろう。だがそれは物語の世界の方から見れば、物語の自然物から、現実の創造物へと変化するとも言える。物語は現実に、現実には物語にひっくり返る。そんなふう解釈をしている自分が、あ、無粋だなと感じてしまった。お話の真実を、現実の嘘にしないで……と、あの丸い月に言われているような気になった。創作という嘘であっても、書けば生まれる。だから「何も起こらない。起こらなくていいのだ」。

水上宏樹さんの『たった1人の。』は、作家が足掻いているのが感じられて、とても好感が持てた。戯曲の中の演劇シーンは新劇からアンデラ、昭和から平成の流れ、今現在から見れば内容は一昔前の感覚。けれど演劇三重苦（経済、才能、運）の本質は今も昔もさほど変わらない。これに取り込まれると心が削られる。厳密に言えば、演劇そのものではなく演劇ア라운드、演劇を取り巻く周辺の苦悩。かといって、この作品は演劇三重苦を批判しているわけではない。そこにハマっている自分を冷静に自虐している。自分自身を笑い続けている清々しい自虐。この物語の男がこれからどんな人生を送るのか、作者はその未来を描いてはいないけれど想像できる。この男が人生の終わりに最も幸福な時を思い出したら、間違いなく女と一緒に冷めたポテトを食べたあの時間だろう。

田辺剛さんの作品『留守』はイエスのたとえ話を読み解くような面白さがある。「あいつの胸に刺さると、小さな十字架みたいでしたね」という男のセリフからイメージが広がり、これは神（団長）の留守の間に、エデンの園から逃げ出すアダムとイブの物語なのと思った。この物語では先にりんごを食べたのは男だったけれど、決定権を他者に委ねて生きていたことに女は気づき始める。本当はなんだってできる。自分で考えることをせず生きていくのはある意味楽だ。だから人々は楽しそうに踊っている。ああ、なるほど……！ いや、でも待ってと我にかえる。これは私の勝手な解釈、聖書を用いた勝手なサブテキストだ。この戯曲の着地点も自分の解釈の中に見つけた。つまりこれは、演出や俳優たちがたくさんさんの解釈を持ち込めるようにクリエイションしてこそその戯曲なのだろうと思う。そのくらいこの戯曲の懐は深いのだ。

武田操美さんの『蛇含草ホテル』は、空間と時間を飛び超えていく大胆さと会話のオモシロにうっかりだまされてしまうけど、本当はとても辛辣でとても怖い今の現実を表している。老後という戦慄。静が孤独になりたくなくて飲み込んできた言葉。本当は言いたかった言葉が蛇含草となって彼女を溶かしていった。孤独になりたくないという無意識が、必要な言葉を飲み込ませ、美味しいものを食べることで封じ込めていった。高校時代や結婚生活が、とても充実して楽しかったからこそ、孤独が効いてくる。静と長子、近いようで遠い二人の関係を作るために、まどろっこしい登場人物たちの関係が必要だったのだなと納得する。「なんか知ってるけど、そこまでは知っていない、声をかければ良かった」、と長子のセリフがあるが、それがどれだけ難しいか。もう大人になってしまった私たちはとてもよく分かっている。自分には関係がない、などと言える人間は誰もいない。

竹田モモコさんの『川にはとうぜんはしがある』は、多くの劇場で、多くの団体が上演できる。上演した方も、観劇したお客さんも満足度は絶対に高い。本来「幸せ」は人によって様々なのだ、というまっとうなことを思い出させてくれる作品。丁寧に書かれている。観客を置いていかないし、舞台と客席の乖離がない。私たちはどんな「価値」を大事にして生きているのだろうか。みんな自分が歩いてきた道を否定したくない。自分が来た道の最高峰を幸せと設定する。自分の道は間違いではないと証明するために、次世代にその道を歩かせたくなる。次世代は用意されたその道を選ぶのか、別の道を選択するのか。進化するために先を生きた人間たちがいる。だから決して「わや」ではない。「わやとか言うな」という言葉はとても強く美しい。

田宮ヨシノリさんの『くじらのいびき』を読んで、20代前半をコロナ禍で過ごした新しい作家が登場したと思った。おっちゃんに会いたい。その記憶を共有できるのは、やまもとしかない。家にこもるのはコロナの再現。悲しみは時差を起こして今頃現れる。クーラーの垂れる水は、泣けない自分の代わ

り。まだ片付けられない生乾きの服は、癒しきれない痛みだ。スイカは食べない。もし今スイカを当たり前に食べたら、当たり前じゃないあの夏を忘れてしまうかもしれない。体は生きようとして前に進もうとする。それが生命の仕組み。生きたくない、は進みたくないでもある。進むと未来に行ってしまう。おっちゃんをおいて。どの年代でコロナ禍を体験したかによって受ける影響は大きく異なる。選考会にいる誰も、彼の感覚を本当に理解はできないからこそ、この新しい皮膚感覚を、選考する方が見逃してはならないのだ。

中辻英恵さんの『初心者のための永遠』は、自分という存在への問いをはじめた者たちのための物語だ。どこかで人は、「自分とはなんだろう」と考え始める時がくる。考えずに人生を終えることもある。それは別にBADではなくて。ただ「自分は誰で、どこからきて、どこに行くのだろうか」と考え始めたらそれは永遠に終わらない問いの始まりなのだ。いつしか始まるその日のために、まだ初心者の入り口に立っていないだろうあなたのために、この作品は書かれたのだと思う。